

例のカルデア

めっちゃくちゃ好みの美人^{ファラオ}が

ゲイグイ性的に
迫ってくる件について

FGO

unofficial fanbook

アーラシュ×オジマンディアス

R-18



例のカルデア

めっちゃくちゃ好みの美人^{フアラオ}が

ゲイグイ性的に
迫ってくる件について

例のカルデア

めちやくちや好み^{ファラオ}の美人が

グイグイ性的に迫ってくる件について

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

例のカルデア

めちやくちや好みの美人(ファラオ)が

グイグイ性的に迫ってくる件について

「勇者！ 勇者よ！ 長丁場の周回を終えたようだな、ご苦労であつた！」

「ああ、ファラオの兄さん。おう、今帰つたぜ！」

やたら大きな美声がカルデアの廊下に響く。

その場にいたほかのサーヴァントたちはその大声に一瞬びくつとしたが、ただひとり、アーラシュだけはへらりと笑みを浮かべ、軽く右手を持ち上げていた。

なぜなら、彼は少し先の未来さえも見通せる千里眼を持つている。ゆえに、オジマンディアスがここへやって来ることが予め分かっていたのだった。

あまりにも視えすぎると弊害も多いので普段は極力使わないうようにしているのだが、必要なときには使わざるを得ない。一九九一年のあの聖杯戦争を経てここカルデアへやって来てからというもの、アーラシュの千里眼には、新たな使い道が追加されることとなつてしまった。

(うつ)

まただ。内心冷や汗をかくが、努めて表情には出さない。しやらんしやらんと装飾品が揺れる繊細な音を立てて、王の

中の王、オジマンディアスがアーラシュに歩み寄つて来る。

その一步は力強く、長い足から生み出されるストライドによつてぐんぐんとふたりの距離が縮んだ。そして。

「此度の活躍を余に語り聞かせる榮譽を与えよう。今宵、余のもとへと参じるが良い。黄金のに押しつけられてな、珍しい酒が手に入ったのだ」

「ああ……」

要するに今夜一緒に酒でも飲もうぜ！というお誘いである。彼が回りくどい喋り方なのはもともとで、アーラシュはそれに戸惑っているのではない。なんでもない素振りをしているものの、僅かに視線がぶれている、そのわけは。

(しれーしれーつとした顔でなんてこと考えてんだこの兄さん……！)

視えてしまつているのだ。彼の、王の、頭の中が。

このよく視える眼は女神からの授かりもので、アーラシュ本人とて完全には制御できない。視るべきでないものを視ないように努力することは可能だが、さすがに手足のごとくは扱えないのである。

(まーたこのひとは、つとに……!)

そうしてその、高性能だが不自由な眼でアーラシュがなにを視ているのかというと、彼と己との濡れ場なのだった。

一九九一年、さらにはその八年後の一九九九年と二度の聖杯戦争で彼と同じ時間を生きたが、そんな行為は一切行っていない、はずだ。少なくとも今の自分は、そんな記録を持っていない。それどころか手すら触れたこともないし、ましてや自分たちは同性同士だというのに、それなのに。

『勇者よ……♡』

『んっ、兄さ……♡』

薄暗い部屋だが、見たことのある天蓋付きのベッドがあるのだから、おそらく彼の寝室なのだろう。問題は、なぜ自分たちふたりがそのベッドの上でやらかしているのかという点だ。互いに衣服ははだけられ、はあはあと荒い呼吸が室内に満ちている。

『悦い、ぞ、来い……♡ もつつ、もつつだ……♡』

『あんた、すごいぜここ……♡ 持つてかれちまう……つつ！』

寝転んだアーラシュの腰あたりにオジマンディアスが乗っかっている格好なのだが、聞こえてくる台詞から察するに、挿入しているのはアーラシュの方らしい。

ということとは、彼が受け入れる側になってくれているわけだ。いったいなぜ。伝説によればかの王は百人以上の子を成した、たいそうな女好きであったという。その彼がどうして、こんなことを。

『あ、あ……つつ！♡ アーラシュ、アーラシュ……つつ！♡』
『……つく、う、イクぞ、オジマンディアス……つつ！♡ 出すっ、あんたの、腹んなかに……つつ！♡ 俺の精液っ、受け止める……つつ！♡』

びゅくびゅく。びゆるる。びゅくるるる。

シチュエーションにつられて射精の快楽を呼び起こされてしまい、アーラシュは身震いを必死に押し殺す。

(なんつー想像を……)

たった今視えたのは千里眼の効力による映像のようなもので、現実を起こった出来事ではない。眼前のファラオとて、普段以上に素肌を露にして、性感に頬を染めてなどいない。

ただ、猫のように悪戯な瞳で、その蠱惑的な黄金で、意味ありげにアーラシユを見上げていただけだ。

「お誘い、サンキュな！ んじゃあ夕飯食ったら適当にお邪魔させてもらうぜ」

「うむ」

こちらにはなにも気付いていない振りをして微笑みかけるし、彼とていつも通りに頷くだけという、いかにもな茶番。これにはさすがのアーラシユも困惑をしまっていた。

オジマンディアスは聡い。それに同時代に生きていたこともあり、アーラシユが千里眼持ちだということを知らないはずがないだろうに。

となれば、わざと見せつけているというのだろうか。男に貫かれて鳴いている自らの痴態を。エジプト最高のファラオである時まで称えられた気高き王である彼が、闇で雌になる瞬間を。いったいなぜ。どうして。

考えれば考えるほど、その理由が分からない。分からないのだが彼を変に避けるわけにもいかず、せめて平常心を保てるように、心の準備を整えるのが精一杯なのだった。

千里眼を用いて、彼の居場所を察知して。そろそろまたああ

いうのを視せられるぞ、という覚悟を決める時間を稼ぐ。特別な眼をこんな風に使わなければならぬとは情けないことこの上ないが、こうでもしないとやっていられないのも事実だった。

「ではな」

マントを翻して颯爽と去っていく、その姿すら眩く思えるのだから太陽王の呼び名は伊達じゃない。あんなところをわざわざ視せておいて現実の彼は、常識の範囲内で接近こそしてくるものの、特段追い縋ったり、執着を見せてくるわけでもないのだった。

「ああ……」

片手を振る動作すらどこかぎこちなくなってしまう。

これからどうするべきなのかわからなくなってしまう、オジマンディアスが見えなくなつてからも、アーラシユはその場いぼうつと突っ立っていた。

そもそも、彼と、己とは。

あの聖杯戦争以外にたいした接点もない間柄だ。あちらはフアラオ。こっちは一応、救国の大英雄。字面だけで見ればまあ、横に並んでも悪くないのかもしれない。

ただ、それと本人の実感とは完全に別物だった。アーラシユはひとり自室でベッドに腰掛け、ぼり、と所在なく頭を掻く。威風堂々、とは、まさしく彼のことだろう。尊大かつ傲慢にも見えて、だが慈悲深く、また愛情深い。

オジマンディアスの立ち振る舞いは派手であるが、そこに嫌悪感を抱く者が少ないのも、やはり彼の器の大きさによるものだろう。生まれながらの王。そういう表現が、腹の底からしつくりくる。

当然のように英霊としての能力も高く、おまけに輝くほどの美貌まで備えて。彼が一步步むその優美な動きひとつで、空間がきらめく幻さえ見えるようなのだ。これが神の所業かと、もはや溜息しか出ない。

翻ってこちら側は、戦を終わらせる兵器としての実力こそ自負があるけれども、そこを除けば至って普通の凡庸な男だ。鍛えた身体を魅力と受け取る女もいて、一晚の温もりを得るのに苦労をした覚えはないが、それだけのことだった。

生まれ落ちてこのかた人々の救済を至上命題とする以上、博愛以外の感情をほかの人間に持つなど考えたこともない。心から民を愛し、そして愛され、多くの側室と最愛の妻に囲まれて過ごしてきたオジマンディアスとは、まず土台からして違いすぎるのだ。

そんなふたりを再びめぐり合わせたこの運命に、カルデアという場所に、アーラシユはなんとも言えない複雑な感情を覚えていた。

(参ったなア……)

短い人生ではあったが千里眼とは生前からの付き合いで、見えてはいけない他人の頭の中がたとえ視えてしまったとしても、素知らぬ顔でやり過ごすすべを身につけていたはずなのだ。

頑健な身体を持ち、次々と戦果を挙げ続け、憧憬の視線を浴びて生きてきた。だからこそ己の軸は己の中に持ち、人智を越えた視点でもって救世を成し遂げた、はず、なのに。

(~~~~~たまらん、な……)

そんな自分が彼の前では、どうしても無防備になってしまう。もうここまで来たらはつきりいつてしまうが、彼の外見が、

というか、彼を構成するすべての要素があまりにも好みのドストライクだった。

独特の濃いアイラインにまったく負けることのない、強い強い琥珀の瞳。それゆえに苛烈な性格を宿しているのかと思えば、ときおり妙に子供じみた愛嬌があったり。

また、色気を湛えた美しい声さえ罪ならば、かの悩ましい身体つきはなんなのだ。特にあの腰のライン。あれはだめだ、いわば天の災厄だ。お国柄で仕方がないのだろうが、頼むから一枚だけでいいから、あの剥き出しの胸から腹を布かなにかでくるんで隠して欲しい。後生だから。

「は—————……」

アーラシユは深く深く溜息をついた。

己の馬鹿さ加減については、自分が一番よく分かっている。人並みに肉欲を持つちやいやが、それでも確かに人並みだつたはずなのだ。好色家でも、さらにいうなら男色家でもない。性愛への考え方が今と比べてずいぶん緩い時代に生きたがそれでも、同性をそういう目で見たことはない。

「だってなあ……」

いくらオジマンディアスの見た目がいいからといって、必要以上に関心を持つはずはなかったのだが。

しかし彼と自分とがほぼ同時期に現界し、マスターと契約を交わしてからの数か月の間、目が合うたび、言葉を交わすたびにあんなものを視せつけられている。

ああも艶めかしくて直接的な映像を頻繁に視せられて、意識しない方がどうかしている。ただ女の裸を見るだけなんて比較にならない。己とセックスしているときの彼の表情といたら、本当に、本当に——。

「だア—————もうっ！」

煩惱を振り払いたくて、声だつて大きくなる。

かの王の吐息や、汗ばんだ肌の感触のイメージが頭を離れない。なんなら、現実的な問題として、今まさにアーラシユは勃起してしまっていた。

自身の浅ましさを恥じて、大英雄は真つ赤になった顔を両手で覆う。今夜、彼の部屋に行かねばならないのに、いったい自分は何にをしているんだろう。

「はあ……」

もう何度目かの溜息が唇から零れ出る。強がりではなく、これなら世界を救ってみせる方がよっぽど簡単だ、とさえ思った。

「……というわけなんだよなあ」

「なーるほど……」

やけつぽくアーラシュが放り投げた言葉に、立夏はそれでも素直な相槌を打っていた。

サーヴァント用よりは少しだけ広いマスター専用の部屋で、ふたりはベッドに腰掛け、仲良く肩を並べている。

あれから悶々としてカルデアをうろついていた際、「どうかしたの、アーラシュ？」と彼から声をかけられてしまったのだ。

いつもであれば「ん？ 別にー？ なんでもないぜ！」と答えていただろうが、今日のアーラシュは心底参っていたので、

つい近況を軽く話してしまっていた。案の定もつと詳しく、と言われてしまい、ここへと連行されて現在に至る。

「つまり、ちよつと好みのコにガンガン言い寄られてて参っちゃつてる、と……。なんか羨ましい悩みじゃない？」

「いや、まー、ハハハ。なにぶん経験がなくてな！ どうしたもんかと思つてるところさ」

無論彼の名は伏せたし、ちよつとどころじゃなくめちやくちやに好みの相手だったことも含めてそうとう捻じ曲げて伝えておいた。正直に話さずに相談事なんてちゃんちやらおかしいのだけれど、そうまでしてもなにかしらのアドバイスが欲しい程度には、弱り果ててしまっていた。

そんな気持ちでいるときに、我らがカルデアのマスター、藤丸立夏はどうにも話しやすい雰囲気をお持ちなのだ。なんだか妙に頼りたくなってしまうって、少々困る。

「あー、もしオレで良かったら……。その、間に入って、いい距離感でいられるように協力しようか、とも思ってたんだけど……。うーん、そういうことじゃない、……。のかな？」

「だなー！」

笑い飛ばしてはみるが、自分でもなにをやってるんだか分からなくなってきた。こんな相談、される方だってお手上げだろう。

「……じゃあアーラシュは、自分の気持ちを整理したい、……のかもね」

何気なく彼が口にした台詞に、ずどん、と胸を射抜かれたみ

たいな心地がした。

「……………そう、か……。そうだな、そうかもしれない」
言われてみれば、そうなのかもしれない。

こここのところずっと、胸の辺りがもやもやしていたのだ。たとえいい眼を持つていようが、自分の心だけは見通せない。そこを見抜いてくれるあたり、ああやはり俺はマスターに相談すべきだったのだなと、アーラシユは密かに感嘆した。

「でもそれなら、むしろオレも手伝いやすいかも。あのさ、困ってるって。具体的に、どういう風に困ってるの？ そのひととあんまり話したくない、ってこと？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……。確かにそうだな。実際のところ俺、どのあたりに困ってるんだろう。うーん」

軽く唸って、首をひねる。

濡れ場云々の話はさすがにマスターにはしていないので、頭の中でだけ理屈を組み立てた。どんなときもだいたい直感で対処してきてそれではどうにかなっている身だけに、言語に落とし込むのはなかなか苦労する。

「んー、だって、ほら。あんまりグイグイ来られると、その。弱ったな、って思うだろ。……こ、好みなんだし」

「好みだから余計困るの？」

「そりゃそうだろ！ 手え出しそうになっちまう」
「だめなの？」

「え」

「だめなの？ 手を出しちゃ。向こうにもう恋人がいるとか、そういうこと？」

「え……………」

アーラシユは目と口とを大きく開け、固まってしまっていた。立夏はきよんとした顔で、返事が来るのを待っている。

(……………確かに……………)

なんで、だめなんだろう。

ごくごく自然にそう思い込んでいたので、疑問にすら感じていなかった。

同性同士だから？ いや、別にそこまで性愛にこだわりを持つてるわけじゃない。むしろ性別なんて、おまけみたいなものだとする思う。

彼に妻がいたから？ それはそうかもしれないが、シグルドとブリュンヒルデのように、ふたりして英霊になっているのもない。彼は正しく死別しているのだから、普通に考えれば今の時点では独身だ。配偶者の死後に新たなパートナーができたって、なんの問題もないはずだ。

じゃあなぜ？ なぜ誘いに乗ってはいけないと思っっているのだろうか。あんなにあからさまな誘惑を受けていて、むしろ

好みの相手だつていうのに、それでいてなぜ——。

「そのひとのこと、好きなの？」

「好………っ?!」

あんまりびっくりして、アーラシュはあひるのように口を尖らせたまま冷や汗を流していた。

「………恋して、るんだ………？」

「………っ!!!」

続く言葉を、鸚鵡返しにすらできなかった。

恋。恋とは。短い生涯で故国を救うことはできても、アーラシュはついぞそれを知り得なかった。市井の人々はみな庇護の対象で、恋愛という観点で見ようという気も起こらなかったのだ。

では、彼は？ 偉大なるフアラオにして王の中の王、かの美しきオジマンディアスはアーラシュが守るべき、儂く力なき存在であるのだろうか？

答えは無論、否である。

「~~~~~………っ!」

ふしゅう、と湯気が出そうなくらいに顔が熱い。日焼けした肌が、それでもきつと真っ赤に染まっているのだろう。

つい目をやった先の立夏は、なんとも表現し難いような、慈しむような笑みをこちらに向けている。

「恋、してるんだね」

「………っあ————………!」

とうとうアーラシュはベッドに倒れ込んでしまった。

そうか、これが恋か。いたたまれなくて、恥ずかしくて、いろいろなことがちゃんと考えられていない感じがするし、ちょっとしたことでも心臓が爆発してしまいそうな錯覚さえ起こっている。

なるほど、己のおかしな状態をつらつらと列挙してみれば、客観的にはそう思えなくもない。知識としては当然知っていたものの、まさか自分がそうなるだなんて考えもしなかった。立夏に指摘してもらわなければ、おそらく永遠に気付かなかつたに違いない。

「あー、マ、マスター………？ お、俺、そんな分かり易い顔し

てたのか……っ!？」

「ああ、違う違う！ 違うよアーラシユ、オレだって今日話聞いて初めてそう思ったんだもの。でもね、うん。話聞いてみちやったら、そうなんだろうなってすぐ分かった。結構さ、サーヴァントのみんなの恋愛相談、オレよく受けるんだよね。そういうときとおんなじ感じが、アーラシユからもしたからさ」

「そ……、つかー……」

確かに。言われてみたなら、どうもカルデアではカップル化する英霊が多い。

同性同士だったり、生前から知り合いどころかほとんど接点なんてなかったらみたくないやつらまでいつの間にかくっついていたりして、少し不思議に思っていたものだ。まさか彼女らが、マスターに恋愛相談をしていたとは知りもしなかったけれど。

「恋……、ねえ……」

呟いて、アーラシユは頬を掻く。

「どうかな、ちよつとは落ち着いた？ ここからは自分でゆくり考えてみる？」

「……………！——ああ。ああ、そうだな……………」

につこりと微笑む立夏の視線に照れくささを覚えながらも、

アーラシユは己の内側の、確かな変化を感じていた。方向を失ってばらばらに散らばっていた感情が、とある一点に向かって動き始めたのが分かる。

まだくしゃくしゃだったり、もつれたりしている箇所はあるけれど。もう少し、もう少しでその輪郭が見えそうな気がしていた。

「サンキュな、マスター。やっぱお前、すげえやつだよ」

「こちらこそ！ いつも助けられてるから、少しでも恩返しになつてるといいなあ」

僅かに照れながら、笑い合う。佳い空気だ、とアーラシユは思った。なんだか気持ち前向きになって、経験のないことだって、挑戦してみたくなってしまふ。

マスターの手柄に影響されて周りがみなラブラブモードになつてしまふ、なんてことが実際にあるのかどうか断言はできないけれども、少なくともアーラシユは立夏と会話をしたこと、にわかに覇気を取り戻していた。

立夏にとつてはそれもまたいつものことで、実際のところ、ここではそんなことばかりが続いている。人理を護るためぎりぎりの戦いを繰り返す傍ら、あつちでもこつちでも、大恋愛が花盛りである。

そんな場所であるだけに、ここカルデアには密かに、とある呼称がつけられていた。時空を旅する類のサーヴァントたちからある種畏敬の念も込めて「例のカルデア」などと呼ばれ、ことあるごとに噂の的にされている——という事実は、彼らふたりの知らない話。

施設の奥に厳重に保管された聖杯がきらりと妖しく輝いた。ちようどそのとき、アーラシユは礼を言つて、彼の主の部屋を辞していたのだった。

「来たか、勇者よ」

「ああ、約束だからな。邪魔するぜ」

オジマンディアスは基本、シミュレーションルームに籠りきりで過ごしている。魔力によつて大幅に姿を変えられる部屋とあつてかなり広く、内装も豪華だ。

これは彼の持つ絶大なリソースゆえの結果であつて、並のサーヴァントじゃこうはいかない。

「待ちかねたぞ。遠慮は無用だ、こちらで休むがよい」

くい、と視線で示されたのは、大きなベッドに寝転んで盃を揺らしている彼の、すぐ隣の空間だった。ぼっかり空いたその場所に、彼の傍らに腰掛けるといふことだ。こくりと喉が鳴る。確かめるようにかの黄金の瞳をみやれば、千里眼を通じて、またおかしなイメージが展開された。

『ゆう、しゃああああ……っ！♡』

『つく……！♡』

座位で睦み合い、快楽を極める自分たちの姿が視える。艶を含んだ切羽詰まった声、湿度の高い空気、そうしてオジマンディアスの媚肉にペニスを絞られる甘さ、までもがいつぺんに伝わつてきて、アーラシユは強烈な目眩を覚えた。

「……兄さん！ あんたこれ、わざとやってるんだらう!？」

「ほう？」

ベッドへ近づくこともできないまま棒立ちで俯くアーラシユを、オジマンディアスは愉快そうに目を細めて見つめている。「これ、とは何のことであらうなあ。其方には何が視えている？ 興味深いぞ、疾く聞かせよ」

「くくくくつ、俺は、視ないようにしてんのに……！ あんたのっ、頭ん中！ 俺とあんたが……！ どんな魔術か知らんがなにかしら干渉して、俺にぶつけて来てんだろ！ いったいど

ういうつもり……、なんだ!？」

「ははっ」

緊張を高めているアーラシュに反して軽く笑い、オジマンディアスが盃をすぐそばのテーブルに置いた。寝そべっていた身体を不躙な客人の方に僅かに向ける、その仕草すらどうにも艶めかしい。

「ふむ、面白い冗談だな。では仮に余がそのような真似をしているとして、その真意は何であろうか？ このオジマンディアス、無意味な悪戯を楽しむ趣味はないと思うが」

「……っ」

「なあ、弓兵？」

「……これ、は……」

顔を背けているのでちらと視界に入るだけだが、弧を描く双眸といい、きゅつと持ち上がった口角といい、彼の雰囲気はとにかくからかいの色が濃い。

横になったオジマンディアスが立ったままのアーラシュを見上げている格好ではあっても、心情としてはまるで真逆だった。毛を逆立てている仔猫を、飼い主が指先であしらっているみたいなのだ。

「仮に、だ。余自ら頻繁にいかかわしい場面を視せつけて、其方を困惑させてばかりいるとも言おうのなら……、」

「！」

突然核心に触れられて驚き、思わず彼を見つめてしまった。不自然に言葉を切ったところまで全部含めて毘だったのだと、なにもかもが終わったあとに気付かされる。

「——それは、其方を挑発している、ということになってしまおうのであるかな……？」

「……っ！」

口調はいつも通りだし、手も足もどこも動かしちゃいない。けれど、神王はその湛える笑みだけでもって、一気に室内を夜の、淫靡な空気へと変貌させてしまったのだ。凄絶な艶に当てられて、アーラシュは一步後ずさる。

「ふふ、ようやく動く気になったか。余にここまでさせておいて、なかなかにしぶといものであったな……。だが、まあ良い。特に赦す。余は寛大である故な。さあ、此方へ……」

「……兄さん……」

「ふふふ」

掌を仰向けて、褐色の指先が婀娜っぽく誘う。見えない糸に引かれるように、アーラシュはベッドへふらふらと近寄って行った。

である。その意味するところが分かるか？ 弓兵。救国の勇者よ」

「……………な……………」

「つまり、な。余は其方を、特別に愛してやろうということだ」

「……………」

ふわりと微笑みかけられて、そんな風に囁かれてしまえばたまつたものではない。思わず彼を押し倒したら、「さしもの勇者もここまで踏み込めば分かるか！ ハハハ！」なんて言われてしまつて、少々悔しかつたので。

アーラシユは強引に唇を奪い、やたらと声の大きな男を黙らせてやったのだつた。

王がくつろぐのを織り込み済みであつらえられた広いベッドは、体格のいい男同士が情を交わすのにも最適だつた。

仰向けになつているオジマンディアスに覆いかぶさり、アーラシユはその首筋に口付ける。ちゅ、ちゅ……、と唇を幾度か滑らせたあと、ゆつくりと身体を起こして、己が組み伏せている王を見下ろした。

「……………いいのか、兄さん」

「何がだ？」

ふふん、と鼻で笑うのは、彼が知らぬふりをしているからにほかならない。アーラシユは苦笑して、今度ははつきりと言葉にして伝えた。

「俺がこつちでいいのか、つて聞きたいんだ。ファラオに対して、不敬つちや不敬だろ？」

「ふむ」

樂しげに、にんまりとオジマンディアスの瞳が細まる。それだけで、否と言う気はないのだと分かつた。

「まあな、大勢子を成した余とて流石に抱かれたことはないが……………。しかし、その方が都合がいいだろう？」

「都合つて……………」

やっぱりやめよう、というのではなかつたが、その言いぶりにアーラシユが眉をしかめる。単純に男役の方が楽だから、という理由でこんなふうになつたつもりはない。

「勘違いするな、そういう意味ではない。その方が、其方に余の真意がよく伝わるだろうと言っているのだ。すなわち——、

余の、特別なれと。余の初めての男になれと、そういうことを言っている。……いかに奥手な弓兵とて、ここまで明かせば納得しような？」

「ンンンン……ッ！」

アーラシユは反射的に唸ってしまった。さすがは夜の方も立派な至高の王、口説き文句さえ手慣れたものだ。加えて、彼が嘘をつくような人間ではないと知ってしまった以上、物凄いくリティカルを喰らったような気分だった。

「に、兄さん……！ あんま、煽らないでくれ……！」

「ふははは！ すまぬな、余は閨での睦言を惜しまぬ故！」

「くっそ……！」

呵々と笑われながら愛撫するのはやりにくいことこの上なかったが、なぜだか自然と身体が動いた。そうか、こんなことをしている自分たちを何度も視せられていたからか、と頭の隅でふと思う。

衣服をはだければ、ほどよく引き締まった細身の胸元が露になる。日頃から肌の露出が多い彼だが、こうしてまじまじと見つめてしまうと、いよいよその色香に参ってしまった。

「すげえ、綺麗だ……！」

「んっ！ ハハ、まるで赤子よな……♡」

からかう台詞も、もはやどうでもよくなっていく。褐色肌に馴染む、薄ピンクの乳輪と乳首。そこに舌を這わせた途端、び

り、と頭の奥が痺れるくらいに興奮していた。

「粒ちゅちゅえ……♡ やらし……♡」

「こらこら♡ そのように吸っては大きくなってしまうのが♡ 其方が育ててくれるのか？♡ ん……？♡」

ちゅうちゅう♡ちゅちゅ♡と突起を吸い、逆側の乳首を指で摘まんでいるアーラシユの頭を、オジマンディアスがよしよしと撫でる。

それも気持ち良かったが、やはりこの、愛らしく色づいた果実の存在がアーラシユの雄をそそった。

奔放な時代であつたがゆえそれなりに女も抱いたし、大きく膨らんだ乳房に欲を覚えることもある。しかしそんなもの、今のこの高揚と比較にはならないだろう。

偉大なる王の、未だ誰も性的には触れていないのだから慎ましい尖り。涎にまみれてふるふると震えているさまが、いかにも淫猥そのものだった。

「あ……♡」

たまらんと思わず声を漏らしてしまったのはアーラシユの方だ。とつくと鎧も消してしまつて簡易な亙衣になったオジマンディアスの、その股の部分が盛り上がっていることに気付いてしまったのだ。

同性に乳首吸われて勃起するファラオって、と半信半疑のままに手を伸ばせば、彼は余裕の笑みでアーラシユを受け止めて

くれる。

つるつると滑らかで高級そうな生地の下、オジマンディアスの男根が、力強く張り詰めているのが分かった。

「兄さん、勃ってんのか……」

「はは♡ 何を言うか、其方とて！♡」

「んぐっ！♡」

突然股間をやわやわと揉まれ、変な声が出た。男にしては細い指が、露骨な手つきで服越しに、アーラシユの肉茎の輪郭をなぞっている。尿道口に指先を軽く押し込み、カリと幹との段差を確かめ、撫でて、擦って、揉み込んで。

「ふむ、これは……？♡ ほうほう、余のものよりも一回りばかり大きいか？♡」

「ひ……い、兄さ、兄さん……っ！♡」

「はっは！♡ これではどちらが攻めているのか分からんなあ？♡」

腰から下がとろけそうなくらいに悦い。あんまり気持ちがいものだから、彼の手ごと、己の股を彼のそれへと押しつけてやった。

性交を真似てゆさゆさ、と揺すってやったなら、オジマンディアスがふ♡、ふ♡、と僅かに息を上げるのを感じた。

「兄さん……♡ こうやって、俺……♡ あんたの中に、入りたい♡ あんたの中を、味わいたい……♡ なあ、だめ

か？♡ 俺のこれを、あんなの、中に……！！♡」

「ふはは……♡ 存外情熱的ではないか、勇者よ！♡ 良からう、これを使え……♡」

どこからか喚び出したのだろう、繊細な細工の入ったガラス瓶がアーラシユの腕に押し当てられた。受け取って揺らしてみれば、たばん♡ともったりした音がする。

「潤滑剤だ♡ 女の後ろを悦くしやるるときに用いていたものよ♡ その意味が分かるな？♡ 弓兵……♡」

「ああ……♡」

くすくす笑いを交えて伝えられたのは、彼の意思。アーラシユによって女にされることを赦すと、そう言ってくれているのだ。オジマンディアスの内心を思えば、かあつと下腹が熱くなる。

「兄さ、ん……♡」

思わずすぐさま瓶を開け、中身を手にぶちまけていた。彼を見ればさすがの察しの良さで、霊衣をすべて消し去っているところだった。アーラシユも做って、ふたりして裸になる。どきどきどきどきと、己の鼓動が馬鹿みたいにうるさい。

「痛かったら、言ってくれよな……？♡」

そう声をかけ、アーラシユはオジマンディアスのアナルに触れた。くるくる円を描くように優しく撫でてから、潤滑剤のとろみを借りて、そつと中へと指を差し込んでいく。

「だ、だいじよぶ、か……? ? ♡」

「ふ、ははは……ッ ♡ おかしな心地、よな ♡ よい、続けよ…… ♡」

まるで初めて同士みたいに、いちいち確かめながら行為を進める。

オジマンディアスはそうでもないようだったが、アーラシユは女性相手にでも、後孔を使わせたことがない。セックスに関しては、話に聞いた以外のことは、至ってノーマルな経験しか持っていなかった。

(しかし、な……? ? ♡)

それにしただって、抵抗感がほぼゼロだった。あれだけ自分たちの情交を見せられてきたからなのか、どうなのか。そのうえ、どうも聖杯からのバックアップの気配さえ感じられていた。

なんとなく、分かるのだ。男にとって悦い場所が確実にあると。肛門を入れて腹側、きつと返ってくるだろう手応えを求めてアーラシユは神王の胎内を探る。そんな知識、生前にも、聖杯戦争の間になんて得る機会はなかったはずだ。

(……あつた! ♡)

「ん! ♡」

英霊同士が肉体を繋げるのを聖杯が支援する、そんな事象が本来にあるのか否か。判然としなかったが、そんなことは今の

アーラシユには二の次だった。

眼前の美しい男とひとつになる、その手順が示されているという幸運が、ただただひたすらに有難い。

「兄さん……、ここ、どうだろう…… ♡ 前立腺、っていうみたいだ…… ♡ っ、触ると、男は悦くなるんだってさ…… ♡」

「ハハ、左様か ♡ ふ、む、悪くな…… ♡ ん、んっ! ♡」

彼とてこちらは未経験と言っていたが、意外とすんなり指が飲み込まれていく。入口を入れてすぐ、腹の方にあるしこりとんとんと圧してやると、これまで見たこともないような色っぽい表情で息を詰めていた。

(エツツツツツ……! ♡)

「っは、はは、勇者、よ……!! ♡ あまり見つめるな、余の顔に穴があ、く……っ! ♡ んううう……っ ♡」

冗談さえ吐息混じりで、もう喘ぎ声にししか聞こえない。

ときおり跳ねる身体、熱い呼吸、そして彼の中のぬかるみ具合に全部持っていかれそうだった。どこかふうわり甘い香と汗とが合わさった匂いを感じながら、いよいよこの麗しいひとを抱けるのかと、仄暗い興奮に胸が高鳴る。

「我ながらなかなかの、仕上がりよな…… ♡」

耳元でそう零されて、アーラシユはゆっくりと身を離す。そうすると、軽く開かれたオジマンディアスの脚の中心で、勃起した性器がとるとるとと蜜を垂らしているのがよく見えた。彼の中に潜り込んだ三本の指を動かせば、褐色の肩がひくんと揺れる。

「兄、さ……♡ も、いいか……??♡」

「ふふ♡ 疾く、其方を味わわせよ……♡ ん、うっ!♡」
逸る気持ちで、いささか乱暴に指を引き抜いてしまった。

色濃い両膝の裏を取って、女のように股を開かせ、間に己の胴を捻じ込む。

そういえば避妊具を使うべきだったかと一瞬思ったが、特に止められもしなかったのでよしとした。所詮サーヴアントであり、男同士の身だ。当たり前だが機能上、孕ませる可能性はない。

「っあ……!♡」

「~~~~~……っ!♡」

柔らかく解れたアナルへ、はっぱつに張った亀頭を押し当てる。ぬる、と先端が思いのほかうまく侵入を果たして、アーラシユは思わず声を漏らした。

女性経験が足りないわけじゃあるまいが、それにしたってこれは。きつい肛門の締めつけをこじ開けていく感覚に、ひどく劣情を煽られる。

「ゆっくり、やるからな……?♡ 先が入っちゃえば、大丈夫だと思っから……♡」

「……………この、程度……!♡ つ、……………!♡」

ぬる、ぶ、ぶ……♡と慎重に慎重に、じれったいまでの速度で腰を進めていく。多少勝手は違えど、久しぶりの交合だ。どうしたって温かく濡れそぼった場所へ早く沈み込みたくなってしまうけれど、意志の力でそれを抑え込む。

なんとも言えぬ違和感をこらえているのであるうオジマンディアスの表情は苦悶とも愉悦とも判じきれないが、なんにせよ凄まじく扇情的だ。整った顔立ちが頬を染め、胎内を暴かれていく苦痛に耐えようとするさまには、加虐心めいたものが刺激されるのを感じた。

「兄さん、あつたけえ……♡ あんたの中、気持ちいい……♡」

「……然、であるっ!♡ 余は完成されし、ファラオなれば……♡ つう、ぐううっ!♡」

アーラシユのペニスの一番太いところが、肉の輪を押し通る。衝撃に小さく呻き、それでもオジマンディアスは抵抗をしなかった。太くたくましい弓兵の首へ両腕を回して、自身の方向へ抱き寄せる。自然と結合は深まり、ゆるゆると雄芯が肉筒に埋まっていた。

「っ、あ……!♡」

「ふ、はは……♡ 男も悦いぞと黄金のが言っていたが……♡
なるほど、はははっ♡ 数度目の生にして、新境地か……♡♡」

「そりや光荣、……♡」

恋人たちがするように、幾度となく唇を合わせ、唾液を交換する。そうするうちにふたりの下腹がびたりとくっつき、無事挿入が果たされたことを示していた。

ここまで来ればあとは女性にするのと大差なさそうなものだが、アーラシユは辛抱強くその場に留まり、処女を奪われた王の胎が馴染むのを待った。

「くく、殊勝な態度だな……♡ しかし勇者ともあれば、一物も斯様に猛々しいか♡」

「……あんだだって体格のわりにいいモン持つてるだろーが……♡ も、動くぜ……？♡」

「っあ、くう……っ！♡」

アーラシユがねつとりと腰を揺らすと、たちまちオジマンディアスが声を漏らす。ちよつとしたからかいも、余裕を演出するための強がりなのだと思えば愛しさが増した。

そうだ、愛しいのだ。王の中の王、暴君にして至高のフアラオであるこの美しい存在を、自分は確かにいとおしいと感じている。これが恋か、と改めて思ったなら、いやが上にも情欲が滾った。

「兄さん、すげーイイ……っ！♡」
「んんんっ、ゆ、しゃああ……っ！♡」

こんなことであるのだろうか。初めてだと言っていたにも関わらず、彼の媚肉はうねり、震えながら、アーラシユの雄にむしゃぶりついてくれている。

生娘とも娼婦ともベッドを共にしたことがあるが、まるで次元が違うような感じがした。「びったり」なのだ、なにもかも。

狭い入口の締めまり具合といい、内壁の吸いつき加減といい、どこもかしこもたまらなく好ましかった。元はといえばそもそもその容姿がアーラシユの好みのド真ん中を貫いていたのであって、もはや出会いからして聖杯の加護——というか、なにかしらの意図があったのではないかと疑いたくなくなってしまった。

だつて、なあ、こんなに。胸に湧き上がり、喉元までやってきてしまった感情は、吐息と一緒に唇から零れ出た。

「はー、可愛い……♡ 可愛いよあんだ、オジマンディアス……！！♡」

「な!?!♡ 〜〜〜ふっ、ふけ……っ！♡ 其方フアラオに向かつてそのような……っ、んん、うあんっ！♡」

ほおら、なあ。なんだよ、「うあん！♡」って。

軽く突いただけでこれなのだ。おそらくは自分の感じている「びったり」さを、彼も味わっているに違いなかった。眼は使っていないが、それぐらいはさすがに分かる。

女みたいな嬌声を漏らしてしまつた自身にびつくりしたらしい神王は、顔を真っ赤にしてやたらにばちくりまばたきを繰り返していた。

「今のはなんだ、まさか余が？」などと思つていることがそのまま出てるみたいな表情だ。ああ可愛い。あんまりにも可愛くつて——、もつと見てみたくなつてしまふ。

「許可を……♡ 許可をくれ、兄さん……♡」

「……許可、だと……？♡ な……、ん、の……？♡」

「名前♡ あんたの名前、たくさん呼んで……♡ そんな、可愛いつて、愛してつて、何十回でも言いたいんだ♡ だから、許可を……♡ 聞でだけでいいんだ、気安くあんたに呼び掛けて、可愛がるための赦しを……♡ どうか、頼む……♡」

「!♡ !?!♡ !♡ !♡ ……~~~~~!!♡」

大英雄アーラシユ・カマンガのファンだ、と常々公言していた彼にはやや刺激が強すぎたようで、オジマンディアスはぱつと目を見開いたかと思えば鼻から下を両手で覆い、憧れのスターと至近距離で対面した年若い乙女みたいなリアクションをしている。

これを否ととる必要はないだろう、と勝手に判断して、アーラシユは赤くなつた彼の耳元に唇を寄せていく。決して傷つけないようにゆつたりと腰を振り肉を穿ちながら、込み上げる気持ちのままに言葉を紡いだ。

「ここまで言ったのに止めなかつたんだから、もう俺の好きにするぜ……？♡ ほんとにあんた、可愛いやつだよオジマンディアス♡ ほらあんたの中、俺にちゅぱちゅぱ吸いついてくれる……♡ 初めてだつて言つてたのになあ♡ これは俺が相手だから、つてことであらうねばちゅぱもいいのかな……♡ なあ、オジマンディアス♡ あんたももう分かつてると思うんだが、俺たちすこぶる相性がいいぜ♡ あなたのここさあ、俺のに合わせてあつらえたみたい……♡ 俺のこのために、ちゅあんと女になれるように作られてるみたいな感じがする♡ やーらしいなあ♡ いやらしい……♡ 上げー可愛いよ♡ あんたがいとおいしい、オジマンディアス!♡ 王様なのに、めちゃくちゃやさしくさんで側室も数え切れないくらいいて、オスとしての経験値カンストするぐらいの色男だつてのに……♡ なのに、俺に抱かれてくれるんだもん♡ プライドの高いあんたが、こんな股開いて俺に突っ込まれててくれるんだもんなあ……!!♡ そこまでしてくれてるつて、そんな風に思つちまつたらもうだめだつ!♡ あんたが好きだ、愛しい、誰にも渡したくない……!!♡ 今だけは、この霊基だけは、俺のもんであつてくれ!♡ 頼むよ、オジマンディアス……!!♡ 好きだ、好き♡ お前さんが全部欲しい♡ 格好いいあんたも、美しいあんたも、俺の下で乱れて、喘いで、女になつてるあんたも……!!♡ 可愛いオ

ジマンディアス♡ 俺の愛しのファアラオよ……!!♡ あんたをくれ、俺にくれっ♡ 俺をやるから、心も身体もなにもかも、ぜーんぶ残らず俺にくれ……っ!!♡

「ひうう……っ!!♡ んう、ぐ~~~~~~~~っ!!♡
「んっ?♡」

びくびくと彼の身体が小刻みに震える。その長い足でもってこちらの腰をがっちりホルドしてくれているので、なおさらよく伝わってくる。

びちゃちゃ、と腹のあたりが濡れた感触がして、アーラシユはそっと身を起こした。

「お……♡」
「っはあ、見るでな、い……っ!!♡ 不敬……っ!!♡」

見下ろした先では、褐色の肌へたっぷりと白濁が乗っかっていた。オジマンディアスは射精してしまったのだ。アーラシユに貫かれて、思いの丈を囁かれて、それだけで。

彼を思いやっつてゆるゆると攻めていただけに、どちらかという睦言から来る高揚の方が彼を絶頂に追いやったのだろう。そうしみじみと感じれば、知らず頬が緩んでしまう。

男としては見た目も性技も超一級品だというのに、受け手としての、女としての彼は恋に戸惑う生娘なのだ。仮にギャップが魅力になることがあるというのなら、彼ほど極端な性質を持ち合わせた存在がほかにいるだろうか。

「あーもうっ、たまらん……!!♡」
「ささ……っ!!♡ んんううっ!!♡ ん……………」

湧き上がる衝動のままに、オジマンディアスの両腕をそれぞれシートに縫い留める。視線は彼の、濃い色の肌にも関わらずほんのりと紅潮した顔へまっすぐ向け、ゆつたりと腰を使った。「ゆ……しゃ!♡ 待て、見るな……っ!!♡ 余を見てはならんっ!!♡ ふ、け、不敬……っ!!♡ 今は見るな!♡ 待てっ、止せ、止せ……っ!!♡」

「いやいやいや、そりゃあ無理つてもんだせ兄さん……♡」
ばちゅ♡ばちゅ♡と肉筒を穿ちながら、アーラシユはふつと口角を持ち上げる。

いかな太陽王として単純な筋力勝負ではこちらの方が圧倒的に有利で、拘束された腕をなんとか解こうとする彼の努力はほぼほぼ無意味に近かった。ただ変に反発されてしまうと、雄の本能としてはなんとなく屈服させたくなくなってしまっているので、むしろ逆効果といえなくもない。

それに、興味深いことがらが徐々に明らかになっていった。舐めるような視線を浴びせられて、痴態を間近で鑑賞されてしまつて。それでいて彼ときたらどうも、性感を刺激されているようなのだ。

落ち着きを失ってふらつく瞳が加虐者のそれとかち合うた

び、びくん！♡と彼の内壁が収縮する。わざと分かりやすく見
つめてやれば、きゅうううー……♡と締めつけが強く
なって、それからとろけるような抱擁で、アーラシユの男根に
媚び縋り始めるのだった。

「あ、あ、勇者あ……♡ こちらを、見るな♡ 見ては……、
駄目、だ……♡」

「ふふ、ふ、どうしたもんかねえ……♡」

閨での礼儀を抑えてはいるのだが、そもそも千里眼なんて使
うまでもない。女にされる過程を見られて感じてしまうなどと
いう被虐性癖をかか神王が持っていたとは驚いたが、眼前の、
淫らに涙を浮かべた黄金の双眸がなよりの証拠だった。

これに応えてやらねば男ではあるまいと、アーラシユはオジ
マンディアスの胸元に、そっと片手を這わせていく。

「んん……♡」

「はは♡ ここ、尖ってる……♡」

すう……♡と乳首の上を通過するように撫でてやれば、
チョコレート色の肌が僅かに粟立つ。すっかり出来上がってし
まったオジマンディアスはあ、と熱い息を吐くのを視認して、
アーラシユもまた肉欲を昂らせた。

「かーわいい……♡ あんたのここ、ちっちゃいのに一生懸
命勃ち上がって、俺に触って♡♡って言ってるみたいだ……

♡ 百戦錬磨のあんただろうが、ここはまだまだ未使用って

ことか？♡ 慎ましくって……、いっぱい触って育ててやり
たくなるなあ♡ ちよつと下品なくらいに大きくなつちまっ
たら♡ いつもの調子で肌の露出もできないな♡ さすが
にぶつくり乳首が露になつてたら、みんな目のやり場に困るだ
ろ♡ あんたが見せつけてやりたいなら、俺は別に構わない
けど……♡ まあ乳だの股だの、ほとんど見えちまつてるじ
やねえかみたいな恰好のやつらもいるしなあ？♡ つははは、
なんだよ兄さん……♡ 口の端から涎垂れてるぞ♡ こう
いうのも好きなかあんた♡ 意地悪言われちまうのも好き
だったか？♡ あーあー、すっげえやらしい顔しちやつて
……！♡」

「つふあ、ゆ、しゃ♡ も、やめ……♡」

戸惑って、怖がって、それでいてオジマンディアスの表情は
ぐじゅぐじゅに溶け、こらえきれない劣情を示している。

もともと好みの容姿をしていた麗人が、まさかここまで雌の
顔つきを見せてくれるだなんて。さほどなかったはずの征服欲
が、感じたことのなかった独占欲が、身体のどこから湧き上
がってますます楔を硬くする。

彼の初めてを暴く、肉体的な意味だけでなく、精神的な意味
合いでもオジマンディアスを暴けていると、どことなく黒い悦
びに血肉が沸き立っていた。

処女を相手にするんならいつも以上に優しくしてやらなく

ちやな、とか、以前ならせいぜいその程度でしか考えられなかっただろうに。彼には、オジマンディアスに対してだけは、誰も見たことのないような奥底の願望まで、自分の前に曝け出させたくなくてしまう。

突如降って湧いた凶悪な感覚に、アーラシユはその身をぶるりと震わせた。

千里眼は使っていない、と思うのだが——、この次自分がどうすべきかが、なぜだかはつきり分かっていた。ひんひんと可愛らしく喘ぐオジマンディアスの耳元に唇を寄せ、たつぷりと吐息を混せて囁きかける。

「ほんとに可愛いぜ、あんたのここ……♡ おっ・ば・い……♡
♡ すっかり敏感になっちまって、イヤラシイな……！♡」

「ヒ、つ、！♡ な、んだ……っ?!♡ うあ、あ、くくくくくくくく……っ!!!♡」

俗に言う、淫語、というやつだ。生前から、戦仲間が酔っぱらってはこの手の話題で盛り上がっていたし、現代の娯楽のコンテンツとしてそういったジャンルが確立しているというこ
とくらいは、アーラシユとて知っていた。

ただ、使ってみたのは初めてだ。これまではその必要がなかったからだ。情交に肉体的な快楽以外を求めたりしなかったし、そうしたいという気持ちすら微塵も持っていなかった。

けれどいざ使ってみればなるほど、特にオジマンディアスには効果靦面といえそう。わざわざ卑猥な言い回しを直接鼓膜に吹き込んでやった結果、愛しのフアラオは胎を抱いたアーラシユのペニスごとぎゅうつと身を竦ませ、勢いよく射精をしまっているようだった。

「ひぐ、うう、あああ……っ!♡ つくう、うううううううう……っ!♡」

多くの女を孕ませた逞しい男の精液が、びゆる！♡びゆる♡びゆるるるるっ!♡と、笑えるほどの活きの良さでアーラシユの腹筋へぶち当たる。

その感触に、口角が悪い感じに吊り上がっていくのが、アーラシユ本人にもよく分かった。

「ん？♡ なんだ、イったのか……？♡ おっぱいって呼ばれたのがそんなに悦かったかい偉大なる王よ♡ やっぱ、フアラオ・オジマンディアスはおっぱいってからかわれるのが大好きだったんだなあ♡ ふふ、可愛いねえ……♡」

「な、くくくくくっ!♡ 侮辱はゆるさ、ぬ……っ!♡ いか
かな勇者とてこれ、は、……んうっ♡ ひううううううんっ、
んんんんん……っ!♡」

喋っているのもお構いなしに、アーラシユはオジマンディアスをぐるりと反転させ、ベッドの上につぶせにした。繋がったまま強引にそうしたので、甲高い声で神王が悲鳴を上げる。

「さっきのあんた、ほんとに可愛かったぜ♡ 見られるのが恥ずかしいのなら、こつち向きならいいだろう?♡ 顔、見ずに、抱いてやるからさ……♡ 俺もイかせてくれるよな?♡ まさか王の中の王が、このぐらいで音を上げたりしないだろ……?♡」

「ん、ぐ、当然であ、るうううう……っ!♡ 余が耐えられぬ、など……っ♡ んぐうううっ、くう……っ!♡」

急に彼の声がくぐもったのは、震える腕で枕を掴み、そこに顔をうずめたからだ。せめて嬌声だけでもどうにかしようとする、その些細な抵抗にたまらない気持ちになる。

挑発する言葉でオジマンディアスの逃げ道を奪って、アーラシユはひととき強く、派手に腰を打ちつけた。ぱあんっ!♡という打音が弾け、「ほむうっ♡」と艶めいた呻きが枕越しに漏れる。

ベッドについていた手を外して身を寄せたなら、密着度の高い寝バツクの体勢に変わった。浅くなりがち挿入の具合も、アーラシユのペニスの大きさでは特に問題にもならない。互いの高い体温を感じつつ、ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡と繰り返して肉穴を穿ってやる。

うねる内壁の感触に、密着した肌の温もりに、そして淫らな交接の響きに、ありとあらゆる神経が昂っていった。頭がぼつとするのに変に感覚が鋭くなって、またそこへ、聖杯の導きの気配が訪れる。

きつとこれでまた、美しい彼の、いびつな部分を思いきり暴いてやれるだろう。彼を悦ばせ、自身もより深い悦に浸ることが出来るはずだ。そう思えば特に拒む理由も見当たらず、アーラシユは自然と、誘われるまま高揚に身を任せていた。

「あー、あー、あー……♡ あんたの、なか……♡ ふふ、太陽王だけあつて、あつたけえな?♡ 俺のこれが気に入ったみたいだ、ちゅぱ♡ちゅぱ♡って吸いついて……♡ まるで女のおそこみみたいにさ、必死になってご奉仕してくれてんだ♡ なあ、こんな可愛いあんたのケツ穴……♡ 突っ込まれるのが大好きな、尻の穴♡ 偉大なファラオの神聖なるアヌス♡ってさあ……♡」

「……っ♡ ……っ♡ ……っ!♡ ……っ!♡」
べらべらべらと饒舌なアーラシユの、やや囁かれた声が耳に毒だった。聞き慣れない卑猥な言い回しにも動揺させられるのだが、それを言っているのがあの勇者であると、その事実がいちいち性感に繋がってしまう。

肛門はもちろん鼓膜まで犯されているような心地がして強い目眩を覚えていたオジマンディアスに、続く言葉が重ねて追

い打ちをかけた。

「これもう、……お・ま・ん・こ……♡ だよなあ♡ 俺のちんぽ挿入れられて大悦びしてるあんたのここ♡ もうさあつ、ま・ん・こ♡ って呼んじやってもいいよなあ……!♡」

「……っひ、んんんんんんー……♡」

あまりに品のない単語は、知識にこそあれフアラオの用いる語彙には入っていなかった。無論、それはアーラシユからも、聞く予定などないものである。

それが今、互いの温度を分け合うほどくっついて、そのままの姿勢で囁かれてしまったのだから一瞬呼吸が止まりそうになった。もしや聞き間違いでは、と珍しく問題から逃避しようとした王の耳に、すぐさま現実が飛び込んでくる。

「っはあ、フアラオまんこ気持ちいい……っ!♡ 子作り得意な王様のケツまんこっ♡ ……ここがこんな気持ちいいってこと、知ってんの俺だけなんだよなあ……っ!♡ オジマンディアスの、神王まんこ!♡ イイ、すげえイイっ、えっぐい動きで俺のちんぽにむしやぶりついてくれやがる……っ!♡ まんこ呼びされてはしゃいじまってるんだよなあ!?!♡ いやらしいなあつ、あんたのここは……っ!♡」

「~~~~~っあ、やめよ、やめ……っ!♡ んふウううん

っ!♡」

自分よりも体格のいい男に圧し掛かられているので、たいして身動きもできやしない。

無理に首を持ち上げて制止しようと声をかけたが、ぐちゅん!♡と腹の中に沈み込んだ男根によって黙らされてしまった。枕はもう、己の汗と、口の端から垂れた唾液でびちゃびちゃになっている。

「やあだね!♡ あんただけイクのじゃずるいだろっ♡ 俺だつて出したいんだ♡ できれば、そう……♡ 極上のおまんこの中でっ♡ 思いっきり射精してえなあ!♡ ともない美人の、とんでもなく気持ちいいまんこでちんぽしごかれてさあつ!♡ どびゅどびゅ♡って、ザーメン……っ!♡ ぶちまけたいっ!♡ 俺だつて男だぜ、オジマンディアス!♡ 惚れたやつに種付けしたいって思うのは道理だろう……っ!♡ あんたがたくさんの女を身ごもらせたようにっ♡ 俺もっ、オジマンディアスの処女まんこに……っ!♡ 子種やりたいっ♡ 初物に男を教えてやりたい……っ!♡ まんこっ♡ オジマンディアスの新品まんこっ♡ あんたのまんこは俺のもんだつ!♡ 俺の精の匂いでいっぱいにしやるんだっ♡ 寄越せ、寄越せ、おまんこ寄越せ……っ!♡ 全部俺のもんになれオジマンディアスううううううううううううううううううう……っ!♡」

「ひい、あ、あああああああつ♡ んああ、ふあ……っ！♡」
降り注いだのは、救国の大英雄らしくもない我欲と肉欲に満ちた呼びかけだった。ひとの形をしたひとではない生き物、平和を成すという偉業の前にあつては自己犠牲以外を知らぬ者、そんな彼に、人間らしい欲を教えてやりたいと思っていたのはほかでもないオジマンディアスだ。

生前に最愛を得た神王、人間を越えた存在でありながら人間の生き方を肯定してきた自身にこそ彼に伝えられることがあると、そう考えていたのは真実である。それゆえに、アーラシユの独占欲、淫欲をぶつけられるのはある意味本懐であり、あの好ましい嘎れた声でそれを聞かせられれば歓喜で胎内も震えるというものだ。

一方的に与えられる衝撃と快楽のなか、視界にはちばち弾ける光の幻を見ながら、しかし太陽の王にはどうしても受け入れ難いフレーズがあつた。

確かに女のような扱いを受けてはいるが、そこは、排泄のため器官であり。断じて、断じて、女性器の、それも下劣な俗称などで、呼ばれていい場所ではないのである。これはそれこそ、ファラオ・オジマンディアスの名に誓つて。

「ちが、ああ……っ！♡ ゆ、しや、ちあうううう……っ！♡」
「なあーにが違うんだかねえ……っ！♡」
「ひいん……っ！♡」

オジマンディアスの否定を受けて、アーラシユは彼の腰を引き寄せて四つん這いにし、後背位の姿勢に持ち込んだ。ウエストからするりと手を滑らせると、想定通り、股間でいきり立っている王の一物に行き当たる。

「なあ♡ だってあんたしっかり感じてるんじやねえか、おまんこで……さっ！♡」

「ふぎゅううううううううっ！♡」

すばあんっ！♡と肉を抉る勢いで腰を打ちつければ、聞いたことのないような間抜けな声がオジマンディアスの唇から飛び出した。それに満足することなく、アーラシユは二度、三度と、彼のアナルを肉棒で犯す。

「ほおおおおおおおおっ！?♡ やめ、ひやめ、うあう、あうっ！♡ そこばかり……っ、そこばかり、しにや……っ♡
へあんっ！♡ ひあう、おう……っ！♡」

「んっ、ん……♡ つはは、ここがイイんだな、前立腺……、つてやつ、やつばここがあんたの悦いトコなわけだ♡ ここ突くとき、わっかりやすくまんこが……きゅん♡つて♡ 『あっ好き♡ そこ好き♡ おまんこ気持ち良くなっちゃう♡』つて、俺のちんぽに教えてくれんだよ……、なっ！♡ ほらっ！♡ ほらあああつ！♡」

「んあっ！♡ あっ、そのような……っ！♡ くくくくくくくだめだもうっ、出……っ！♡ 出るっ、出てしまっ、精

液が出……っ！♡ ～～～～～～～～～んぎいい
 いいいいいいいいいい……っ!?♡

凄まじい悲鳴が上がったのは、射精寸前の勃起。ニスを力強く握られ、射精を妨げられたからだだった。発射準備を整え、思うさま快感を受け止める気味でいた神王のそこは、急な妨害によってびくびくと惨めに身を震わせている。

「だーめだ……♡ 偉い奴だからってこういうことはちゃんとしなくっちゃなア、オジマンディアス……?♡ お前の、ここは、なんだった?♡ 俺のちんぽがつつり銜え込んでるここの、その振る舞いにふさわしいお名前は……♡ なんだろうなああ!?♡ お前本人がしつかり認めない限り、……イかせてなんて、やらないぜ……っ!♡」

「……な……、ッ……!!♡」

愕然と目を見開いて振り向くフアラオの前に、かの大英雄は意味深な笑みを返した。そうしてその分厚い膚を持った手で、ぎゅつと太陽王の性器へ力を込める。肌からも感じるような本気度に、オジマンディアスはごくりと唾を飲みこんだ。

「勇、者よ……♡ 待て、待て、貴様、そんな……っ、ひぎゅうっ!♡ ううんんっ、ん……っ!♡」

「わーかってんだろお、本気も本気さ……♡ なあこの、この穴だよっ!♡ 硬くて太いのブチ込まれて大悦びしてるエロい穴……っ!♡ これの!♡ 名前をっ!♡ 聞かれてん

だよ王サマああああああ……っ!♡」

「……………あつ!♡ 止せ!♡ 止せ、やめろおとおお……っ!♡ 見るなっ!♡ 余を見るでないっ!♡ ああっ!♡ やめろ……っ、やめてくれ……っ!♡」

繋がったまま再度仰向けにされ、黒曜の視線にまたしても曝される。片手でオジマンディアスの太腿を掴んで広げ、もう一方の手でその雄を締め上げるなどと、不敬にもほどがある体勢だ。

けれど、オジマンディアスはこの状況から抜け出す手段を既に見失っていた。当初の気遣いはどこへ行ったのか、ぐちゅん!♡ぐちゅん!♡ぐちゅん!♡ぐちゅん!♡と根元まで欲望を叩き込まれ、思考はすぐに散り散りにさせられてしまう。

筋力ではとうてい勝てないのだからもう灼いてしまうしかないのだが、それにしあって魔力のコントロールさえおぼつかない。集中したいと思うのにそのたびイイところを擦られてしまつて、「ほぎゅんっ!♡」と舌を突き出しながら喘いでしまふのだ。

みつともない声を、汗と涙でぐちゃぐちゃになった顔を、なにもかもを聞かれ見られてしまつていと思えばたまつたものではない。感じたことのない羞恥で下腹が膿んでいるかのよう熱を持つ。堂々たる王としての己には、恥ずべき部分など僅かもあつてはならないのに。

「ふざいいいいいいいっ!?」

「最中にほかごと考えてんなよ……!!」

「んな余裕なら、もつと手酷くしたっていいんだぞ!!」

「うあ、あ!」

「待って、待つへくれ勇者あ♡ このような……っ、はぎゅうっ♡ うんっ!!」

「ああイっ、も、イかへ……っ♡ 嫌だっ!!」

「いやああああ……っ!」

「容赦なく見下ろされつつ犯されるだけでも辛かったのに、アラシユはさらに責めをきつく変化させた。ず♡ぬぐ♡と媚肉を貫きながら、ペニスを堰き止めている手を緩めたり締めたりしだしたのだ。

「単純なピストン運動では手を緩め、弱い部分をぐつと突くそのタイミングでオジマンディアスがイきそうになると、すかさず器具を握って射精できなくさせている。器用にもそれを何度もし繰り返すので、オジマンディアスはもはや目の焦点すら合わないレベルにまで追い込まれていた。

「ちかちかと目の前の景色がまたたき、身勝手な間隔で襲いかかる絶頂の予感延々と半端に流されてしまっている。こんな風にされていなければ、もうとっくに三、四回は遂情していただろう。

「あああああッ!」

「も、いやだああイきたい……っ!」

「♡ 出したいのだ……!!」

「♡ ゆ、しゃ、勇者よ……っ!」

「♡ も、許し、許してくれ……っ!」

「ん……?」

「ぼろぼろと涙を零し懇願するオジマンディアスへ、献身の英雄は笑いかけた、ように見えた。

「ただし、にこーつと人のよさそうな微笑みを浮かべたあと、彼の口元は昔もなく、わざとらしくその言葉を形作ったのだった。読唇の心得のない古代王とて、見てすぐそれと分かるくらいに。

「う……!!」

「ん?」

「どうしたア、オジマンディアス……?」

「そうして雄弁な、珍しく酷薄な色を湛えた黒い瞳が己に向かい、復唱せよ、と命じていることも。従わなければイかせないぞと脅かされているということまでも、オジマンディアスにはしっかりと読み取れてしまっていた。

「従いたくはない。従うはずもない、が、このままでもいられない。とうに答えの出ている問いを前に、ただただ時間だけが過ぎる。断頭台上るような気持ちで、オジマンディアスはわななく唇をかすかに開いた。

「……ん、こ……」

「おお!」

「言えるじゃないか兄さん、もう一回?」

「……ま、……」

「うんうん、いいぞ♡ あんたならできると、立派な王さま!」

「♡ さあはつきりと、もう一度……?」

「~~~~~ふうんんんん……っ！♡」

小声でなら、とつくに口に出しているのだ。けれど、そんな程度では許さないとばかりに、子供にでも言い聞かせるみたいに、あの朗らかな笑顔が刃となつて切つ先をこちらに突きつけている。

そのくせ、ゆら、と揺れる彼の腰つきは、オジマンディアスの悦いところを確実に煽っていた。頂点へ達するのには弱すぎる、しかしこの先の悦を期待するには十分な圧力で、初めて男を知つた未熟な内壁をこすってくる。

いきたくて、恥ずかしくて逃げ出したくてそれでもやっぱりいきたくていきたくて、オジマンディアスはついに陥落した。妄言を否定する良識を捨て、神聖なる王としての矜持を捻じ曲げて、かの忌まわしい単語を、明確に口にする。

「ま……♡ お、……っ、おまん……っ、こ……♡ おまん
こ……っ！♡」

言つてしまった。こんな低俗な音は、高貴な唇に乘せるべきでないと分かっているのに。それと同時にたかが淫らな言の葉の類ではないか、と思ひもするのだけれど、オジマンディアス

の頬はかつて感じたことがないくらいに火照っていた。

「……………、……………っ、んう……？♡」
それにしたつて、ある意味死にそうなくらいの勇気を振り絞つて彼に応えてやつたというのに、あまりにもなんの反応もない。

「恥ずかしさに顔を逸らし、ぎゅつと脛を閉じていたオジマンディアスだったが、不審さにおそろおそろ薄目を開いた。

「うん、佳し！♡ ただな兄さん、まんこ♡つて言うだけじやなんのこっちゃ分つかんねえなー♡ 誰の、どんなまんこを、どいつの、どこでどうされたいかって、ばしつと言つてくんなきやな！♡ いつものあんたみたいに、遠くまで聞こえるようまでーつかい声でさあ……っ！♡」

「な……っ！♡」

あれでも、かなり譲歩したのだ。王たるもの、否は否であると突っぱねるのが仕事のようなものなのに、それを折つてでも応じてやつたのだ。

「賢いあんたなら言わなきやどうなるか、分かるだろう……？♡ ほーらほらほら、ここだ、ここ♡ あんたがメスになつちまうとこ……っ♡ 押すぞ、いっぱい押しちまうぞ！♡ もちろん射精はお預けしたままだ、辛いだろ？♡ これは仕

方ない、あんたじゃなくてあんたのカラダがこんな男に弱いのがいけない♡ だから負けていいんだぜ兄さん♡ やむを得ず、つてやつなんだからさ……っ！♡」

「あああああああああああああああつ!?♡ いやら、もおいや……っ！♡ 勇者!♡ ゆうしやあああああつ!♡ おつ、おんっ!♡ ひぎゅ、うぐっ♡ ンおああつ、あはああああああああああああ……っ！♡」

また始まってしまった。ずん!♡ずん!♡ずん!♡と貫かれて、絶頂しようとするたびに性器をぐつと戒められる。頭の奥が空振りの余韻で痺れ、とうとう涎だけでなく鼻水まで垂らしてしまっているのが自分でも分かった。

「いやら!♡ ひい、そこ、あああ……っ!♡ だめだつ!♡ もうやめ……っ、んぐううううううううう!♡—そこは、ひア!♡ あああ、あ……っ!♡」

ゆっさゆっさと揺すられて無様に鳴く、これでは誇りもなにもないただの性玩具ではないか。そんな考えにすら、ペニスが一気に張り詰める。頂きへと昇ろうとして、またかの男の手によって解放を取り上げられる。

「負けていいんだぜオジマンディアス……っ!♡ あなたの身体はもう女だ、こんだけちゃんぽに善がり狂ってりや、違うって言い張ることもできねえだろうよ!♡ あんた、ちゃんぽに

負けたんだ!♡ 偉大なるファラオ、オジマンディアス!♡ 自分の国を守り抜いたあんただからこそ、敗戦国がどうなるか……つてのはよく知ってるだろう♡ 従属、服従!♡ 王は首をはねられ、民草は奴隷にされたつて文句言えねえつてことになつちまうんだ♡ だから、ほら、なあ……っ♡ もう、まんに素直になれよ!♡ 分かつてんだろ♡ こんな勝てないつて♡ 百人以上子供がいようが、こーんな感じやすい処女まんこじやあ俺のでかちゃんには太刀打ちできないつて♡ ちゃんぽに負けたつて認めちまいな!♡ 楽になれるぜ、気持ち良くなれる♡ まんこ犯されてイこうぜ♡ 救国の大英雄、アーラシュのちゃんぽでまんこイキしろつ!♡ ほーらまんこ気持ちいいつ、ちゃんぽでまんこが気持ちいい♡ つはは、あんたの顔!♡ 『おまんこ気持ちいいしゅうう♡』つて、でっかく書いてあるみたいだぜつ♡ おめめぐじゅぐじゅ、ほっぺもまっかつかで……♡ ま、自慢の美貌は鼻水垂れても健在だけどさ!♡ こおんなえつちなお顔見せてくれたあんたには、俺からちよつとしたプレゼントをしてやろうか♡ なあ♡ 聞いてるか?♡ おーい♡」

「ふへううううつ、んうううううう……っ!♡」
アーラシュがそう呼びかけた通り、オジマンディアスは若干意識を失いかけていた。半分白目を剥きながらみつともなく舌を突き出しているその顔をうっとり眺めつつ、アーラシュは彼

奥付

「例のカルデア めちゃくちゃ好みの美人(ファラオ)がゲイ
ゲイ性的に迫ってくる件について」

【発行日】 2021年06月27日

【発行者】 みたいわ南国

【発行】 南国飯処(み)

【印刷】 株式会社ポプルス

【連絡先】 mitaiwanangoku@gmail.com

【pixiv】 <http://pixiv.me/mitaiwanangoku>

【twitter】 <http://twitter.com/MitaiwaNangoku>

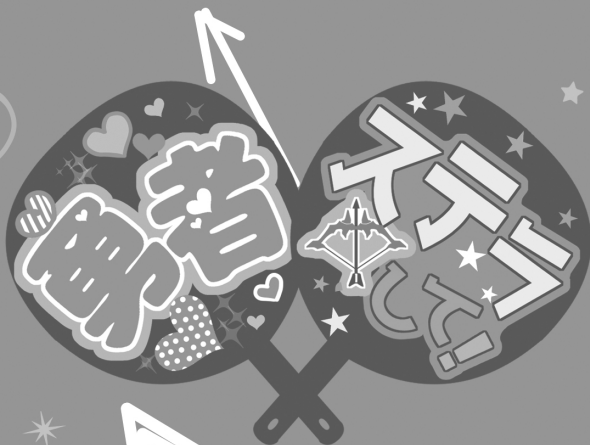
【BOOTH】 <https://kakkomi.booth.pm/>

表紙イラストは IMOMI さま (@imopote1003)、
表紙デザインは藤花しおんさま (@shion_pale) に
お願いをさせていただきました！ 有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

(しれ————とした顔でなんてこと考えてんだこの兄さん……！)

千里眼で視えたのは、オジマンディアスとセックスしている映像だった——！
いつもの調子でなんとか何事もないかのようにやり過ごすアーラシュだったが、
頻繁に視せつけられる自分たちの痴態の前に、ほとほと困り果ててしまい……！？



◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/連続潮吹き/失禁/聖水プレイしつつ自慰/顔面放尿/ハード目/お便器プレイ/鼻孔に聖水/精液排泄/まんべ/くぼお/ガニ股ダブルピースで精液排泄/動画撮影(電気あんま/土下座で頭踏まれつつ自慰/犬プレイ)/豚鼻フック・鳴き真似/温泉浣腸/裸踊り/スパンキング/連続メスイキ/

※ラシュオジ前提の妄想ですが
一部複数カップリングが混在しています※

- ・カルデアメンバー × オジマンティアス
(視姦)
- ・ギルガメッシュ(弓・術) × オジマンティアス
(5P/動画撮影/視姦/陰茎回し/顔・身体に落書き/顔面放尿/)
- ・ニトクリス × オジマンティアス、オジマンティアス × ニトクリス
(5P/動画撮影/視姦/陰茎回し/クンニリングス/淫語強要/顔面放尿/)
- ・ギルガメッシュ(弓・術) & アーラシュ × ニトクリス
(5P/視姦/)

(しれ————とした顔でなんてこと考えてんだこの兄さん……！)

千里眼で視えたのは、オジマンディアスとセックスしている映像だった——！
いつもの調子でなんとか何事もないかのようにやり過ごすアーラシュだったが、
頻繁に視せつけられる自分たちの痴態の前に、ほとほと困り果ててしまい……！？



◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/連続潮吹き/失禁/聖水プレイしつつ自慰/顔面放尿/ハート目/お便器プレイ/鼻孔に聖水/精液排泄/まんべ/くぼお/ガニ股ダブルピースで精液排泄/動画撮影(電気あんま/土下座で頭踏まれつつ自慰/犬プレイ)/豚鼻フック・鳴き真似/温泉浣腸/裸踊り/スパンキング/連続メスイキ/

※ラシュオジ前提の妄想ですが
一部複数カップリングが混在しています※

・カルテアメンバー × オジマンティアス
(視姦)

・ギルガメッシュ(弓・術) × オジマンティアス
(5P/動画撮影/視姦/陰茎回し/顔・身体に落書き/顔面放尿/)

・ニトクリス × オジマンティアス、オジマンティアス × ニトクリス
(5P/動画撮影/視姦/陰茎回し/クンニリングス/淫語強要/顔面放尿/)

・ギルガメッシュ(弓・術) & アーラシュ × ニトクリス
(5P/視姦/)